段玉裁『説文解字注』の反切についての一考察

根　岸　政　子

（1）

『説文解字』は後漢の許慎（字淑重　？—147）によって著された，漢字についての最も古い字典であるが，字音については全ての字に対して音を付けるのではなく，難読字にのみ，‘A読若B’ AはBの如く読むという，Aに対して同音のB字を挙げて説明する方法で音を示している。その後，魏の孫炎に始まるといわれる反切という漢字二字で字音を説明する方法が取られるようになると，『説文解字』（以下，説文と称す）にも反切がつけられた。ちなみに『説文』に最初に音をつけたものは，『説文音隠』であるといわれるが，亡佚して伝わらない[1]。

北宋の徐鉉も『説文』を校訂した際，一字一字に反切をつけているが，添付した反切は，大徐自ら序で述べているように唐の孫愐の『唐韻』によるものである。そして『説文』の代表的な注釈書である，清の段玉裁（字若膺　1735～1815）の『説文解字注』（以下，段注と称す）では，反切を新しく創造せずに，徐鉉の付けた反切いわゆる大徐本の反切を採用した。段玉裁は大徐の反切は即ち孫愐の反切と考えていたので，祗（1上5b　経韵楼本の位置を示す。以下同じ）の条では大徐の反切が誤っているのは孫愐が誤っていたためであると述べている。しかし段注を書き進むにつれて，大徐の反切に疑念を抱くようになり，戟（12下38a）の条では『玉篇』や『広韻』は『唐韻』に依りて誤らなかったのに大徐はどのような唐韻を用いたのであろうと述べ，大徐の反切を『広韻』の反切に書き改めている。このような反切の改訂例は，字づらのみの異同

を含め，400例近くにのぼる。どのような場合に反切の改訂が行われたかについては，反切下字，韻母を中心に考察を試み，その一端を拙稿「段玉裁の支脂之の分部をめぐって」[2] において披瀝した。その結果，改訂理由のわかるものは，次の通りであった。

(1)注釈の基本態度から生じた反切の改訂。

(2)段氏の古十七部説の適用にとって不都合な問題が生じたための反切の改訂。

(3)(1)(2)以外の反切の改訂の意味のわかるものとして第1には古い説文音が判明している場合と，第2には唇音反切の軽唇化の場合である。

中でも(2)の自己の古音学の適用，具体的には古音十七部説の運用の障害となる問題が生じたために改訂を行った場合が大半を占めており，とりわけ十七部説の中心を成す「支・脂・之」の分部に関わる改訂が57例と顕著であった。「支・脂・之」は先秦においては『詩経』の押韻字等で分かるように厳密に分けられていたが，漢代以降次第に曖昧になり同用されるに至った。この「支・脂・之」の独用を発見した段玉裁は『周礼』『儀礼』の注にまで訂正を加え，混乱を是正している。反切の改訂を通して「支・脂・之」の分部を如何に重要視していたかを窺うことができた。なお分部に重きをおいて論を展開したため，(1)(3)の改訂例については代表的なものを列挙したにとどめ，反切上字に関わるの唇音反切についても3例を挙げたのみであった。

そこで本稿では，反切上字について，未検討の唇音反切を中心に，考察を試みることとする。反切の異同については，前稿と同様に説文読書会作成の「諧声標音カード」（仮称）に依拠した。カードは，大徐本は藤花榭蔵版商務印書館摹印本，段注は経韵楼蔵版藝文印書館縮印本に拠って作成された。大徐本の版本による異同が見られるため，適宜，四部叢刊本，四部備要本，『説文解字詁林』所収本に拠って校勘を行った。段注についても適宜，皇清経解本，石印本に拠って校勘を行った。

(2)

反切上字，声母についての異同例は，校勘により43例が除かれたため，80例

ほどである。そのうち改訂の意味のわかるものは，上記の論文の結果からも推定できるが，(1)注釈の基本態度から生じた反切の改訂。(2)唇音に関わる反切の改訂に分類される。

前稿と重複する部分ではあるが，本節では，反切上字に視点をおいて(1)の注釈の基本態度から生じた反切の改訂からみていくこととする。

『説文』は文字の形音義のうち，形を説く書であるから，見出し字—具体的には小篆をさす—は正しい字形でなければならない。かつ『説文』は文字の原形・原義に溯ることを使命としいる。そして段注もその姿勢を踏襲しているので，形すなわち小篆の元来の形が失われ誤っていると判断した時には当然小篆を改めている。字形の改訂により音が大徐の反切と一致しない場合が生じることもあり，その場合には反切の改訂が行われる。反切上字，声母の改訂例は次の２例のみである。（以下反切の異同を例示する場合は大徐本，段注の順にならべる。それぞれの反切には所属する声母，韻を明記した。但し反切下字が同一字の場合は声母のみに留めた。）

桅[3]	過委切（見母／支韻）	桅　章移切（照母／支韻）	（６上20ａ）
愧	余制切（喩母／祭韻）	忕　時世反（禅母／祭韻）[4]	（10下33ｂ）
		経典釈文による	

ともに形声字であるから音を示す諧声符の改訂でもあるが，危声・巵声は古部諧声表の第16部，曳声・大声は第15部にあって部は移動しない。

なお字体の変更ではないが，諧声符は形声字の音を決定する重要な要素であるから本来の音であるか否かを判断する基準になる。瀟（11上２，２ｂ）の子叔切（精母／屋韻）は誤りではないかと疑って広韻の息逐切（心母／屋韻）を提示しているが，これは同じ諧声符肅声をもつ肅及び蕭がともに心母であることが理由であろう[5]。糴（７上63ｂ）はこの字を声としてもつ糴の音から他弔切（透母）を徒的切・徒弔切（定母）に改めている。

次に説解すなわち本義を正しく伝えているか，また本義の音として正しいかという観点から生じた異同をみていく。まず説解を訂正したことでおきたものは鷸（４上54ｂ）。「走鳴長尾雉也」を「長尾雉走且鳴」と訂正したことで巨嬌

切（群母／宵韻）を『毛詩音義』により居橋反（見母／宵韻）に改めている。

続いて説解に対して適切な音が付いていない場合の改訂例をみてみよう。例えば妮（12下16a）の反切は五果切（疑母）ではなく奴果切（泥母）がよいと考えている。その理由は説解である。「婐妮也」とある。もちろん婐（12下16a）にも同じ説解がつけられており，それは旗のたなびくさまをいう旖施と同じで，俗には婀娜と作る。また許慎は旗や禾木のたなびくさまをそれぞれ別の文字で表現しているが皆阿那のように読んでいる[6]。このような理由で那と同じ声母泥母の奴果切に改訂している。また柤（6上37b）の反切は側加切（莊母／麻韻）とあるが，それでは植物の槙（6上1b）を指すことになる。槙は「木閑也」であり植物名ではないので，『広雅』によって士加切（牀母）に改めている。ちなみに反切改訂の典拠に多々用いられる『広韻』では植物と考えている。

このように伝写の間には説解の意味すなわち本義と音とが一致しなくなってしまったものは数多くある。曾（2上2a）は古くは乃と訓じて子登切(精母)であったが，後世‘曾経’の意味に用いられ才登切（従母）に読まれ古義古音が失われてしまったとして，大徐の反切昨稜切の昨（従母）を作（精母）に改めている。その字の本来の意味・読みに戻した例である。同様に傭（8上12a）の大徐の反切余封切（喩母／鐘韻）は今義の傭役の音であるから，説解でいう「均也、直也」という本義の音は丑凶切（徹母／鐘韻）でなければならないとして『広韻』により改めている。このほかに今義の音を本義の音に戻している例は，次のとおりである。

劃（4下46b）	呼麥切（曉母／麥韻）	胡麥切（匣母）	広韻による
般（8下6a）	北潘切（幫母／桓韻）	薄官切（並母／桓韻）	
覩（8下16b）	疾正切（従母／勁韻）	恥敬反（徹母／映韻）	曹憲広雅音による
勺（14上27b）	之若切（照母／薬韻）	上灼反[7]（禅母／薬韻）	周礼音義による
輅（14上41a）	洛故切（来母／暮韻）	胡格反（匣母／陌韻）	

漢書，広韻による[8]

离[9]（14下17b）　呂支切（来母／支韻）　丑知切（徹母／支韻）

佼（8上3a）　下巧切（匣母／巧韻）　古肴切（見母／肴韻）広韻による

姣[10]（12下13b）　胡茅切（匣母／肴韻）　古巧切（見母／巧韻）広韻による

また渴（11上2，28b）は竭（10下21a　渠列切，群母）と古今字で，古く‘水が竭きる’というのを渴で書き記していたとの理由から，苦葛切（溪母／曷韻）を非なりとして，其列翻（佩觿所引の説文による。群母／薛韻）を挙げている。同様の例は，

肅（7上26a）　呼光切（暁母／唐韻）　武方切（明母／陽韻）
莫郎切（明母／唐韻）
ともに広韻の反切[11]

統（13上2a）　呼光切（暁母／唐韻）　武方切[12]（明母／陽韻）

崝（9下8a）　七耕切（清母／耕韻）　士耕切[13]（牀母／耕韻）

瀕（11下1b）　符眞切（奉母／真韻）　必隣切（非母／真韻）

泊（11上1，58a）匹白切（滂母／陌韻）⑯　旁各切（並母／鐸韻）⑤

古今字の中には，次のようなものもある。段（3下27a）の本義は「椎物也」（音は丁乱反。周礼音義）であったが，後に本来は斷の字を使うべきである分段の意味（音は徒乱反）に用いられるようになった。そして本義の「椎物也」には鍛（14上3b　丁貫切。端母）の字が当てられた。鰕（13下13b）で徒玩切（定母）を鍛の如く読むべきであると述べているのは段声を諧声符にもつからであろう[14]。

「一曰」などの別義の音が本義の音となったものもある。それは敦（14下25a）で，本義「乳也」の音に戻すために，古候切（見母／候韻）を乃苟切（泥母／厚韻）奴豆切（泥母／候韻）に改訂している。

字義が多様化していく一つの場合として引伸義がある。卷（9上32a）は「𨇤曲也」（膝が曲がる）という本義であったが，曲がるや舒卷といった引伸義が生まれた。大徐本の反切は引伸義の一つである捲収の音居轉切（見母／獮韻）であると考えた段玉裁は巨員切（群母／仙韻）を提示している[15]。これは

反切下字からみれば上声から平声への同部内での異同でもある。裘（8上59b）も大徐の反切薄回切（並母／灰韻）は引伸義裴回の音であり，本義の「長衣皃」の音ではないと判断して芳非切（敷母／微韻）に改訂している[16]。これも反切下字からみれば同部平声内の異同である。逆に堪（13下30b）のように引伸義が説文ではどの字に該当するのかということが判断基準となって敕立切(徹母)から直立切（澄母）に改められる例もある。

本義以外の意味が生まれるもう一つの場合に仮借義がある。他の字の当て字として使われるようになり本義以外の字義が生じたものである。仮借は同部同韻を原則としているので古音が誤っていたり失われている場合には仮借字から音を類推することができる。豪傑の豪の字は本来は勢（13下54a）を使っていたが，仮借字の豪が通行し廃れた。だから五牢切(疑母／豪韻)ではなく豪と同じ乎刀切（匣母／豪韻）[17]であるべきだとしている。仮借義の反切がつけられてしまったものもある。臚（4下20a）は籀文の膚が通行したため廃れて敷，旅，腴に仮借されたが，本義は「皮也」であり，大徐の力居切[18](来母／魚韻)は仮借義の音であるとして甫無切（非母／虞韻）に直している。古く経伝では畜の字が嬸（12下13a）の仮借字として用いられたため，畜の反切丑六切（徹母／屋韻）がついてしまったので許六切（暁母／屋韻）に改めている。また旡（8下27a）の居未切（見母／未韻）の居を於（影母）に改めたのも仮借字の愛(8上12a烏代切）の反切に基づく[19]。

以上が本義を第一としたためによる反切の改訂である。

伝写の間には往々にしていろいろな書き換えが行われる。音についても然りで，前に述べたように戟（12下38a）の反切侯旰切（匣母／翰韻）はどのような唐韻によったのかと大徐を疑った段玉裁は，これを浅人の読みであると考え，『玉篇』『広韻』によって古寒切（見母／寒韻）に改めている。また長い間には後世の人が創作した文字が混入し，その結果，本来の音が忘れられ，別字の音に変わることもある。土部の塗（13下25a）には「塗也」という説解がついているが，この字は土と水に従う字であるため，後人が水部（11上2，38b）に妄りに増加したとして，木貢切（明母／送韻）に正している。その根拠とし

て読若音を挙げている。水部の説解に「読若隴」とあるが，諧声符尨声[20]ではそのように読めないとして，後人が増したものと判断している。

大徐の反切は今音であると判断して古音に戻しているのは稽(14上36b)。士革切（牀母／麥韻）を槍昔切・七亦切（ともに清母／昔韻）にする[21]。これには引伸義の音も理由の一つとなっている。古音と今音とを併記する例は割合多くみられ，狛（10上35b）もその一例である。大徐の反切匹各切(滂母／鐸韻)も併記しつつ，『玉篇』『広韻』の反切白駕切（並母／禡韻）を証拠として古音傍各切（並母／鐸韻）の肩を持つ。

一方本来の音がどこに保存されて今に至っているかと言えば許慎の説解そのものに残されている。'A読若B' こそは本音を提示しているわけで，音が錯誤している場合に読若音に立ち返ればよいのである。鼓（3下38a）では大徐が公戸切（見母／姥韻）と読み説解の「読若屬」を刪ったのは誤りであると非難し，屬は之欲切（照母／燭韻）であるから敎（知母／覚韻）のように読み擊（見母／錫韻）と双声であるといっている[22]。このように読若の音に基づいて改訂した例は，次のとおりである。

巒（7上7b）	洛官切（来母／桓韻）	「読若新城巒中」 謨還切（明母／柵韻）
泧（11上2，30b）	火活切[23](暁母／末韻)	「読若椒椒之椒」 所八切（山母／黠韻）
鼂（13下12a）	直遙切（澄母／宵韻）	「読若朝」陟遙切（知母）

或体の音が本字の音となったとして改訂したのは，浛（11上2，3a）で古活切（見母／末韻）を『毛詩音義』により戸括切（匣母／末韻）とする。一方同じ諧声符をもつ稰（7上48b）は反対に戸括切（匣母／末韻）を古活切（見母／末韻）に改めている。それは段玉裁の時代に使われていた俗語桄（音は古曠切）が稰の転じた語であると考え，同じ声母の古活切から転じた音と判断したためである。双声が判断の一助になっている例である。ほかに双声を使って本来の音に戻したのは，慨(10下26b)。説解「忼慨也」の忼（音は苦浪切）と慨は双声となることから，古溉切（見母）を苦溉切（溪母）に改めている。旛

（7上21a）も俗に幡が通行したため廃れてしまったが，璠や緐（ともに音は附袁切，奉母）と双声字となることから孚袁切（敷母）を符袁切（奉母）に改訂している。

また鮠（5下22a）では又音の胡講切（匣母）が一音の転じた音だと判断したため，舌音の大口切（定母）を同じ喉音の火口切（暁母）に改めている[24]。

なお禍（6上57b）で乎臥切（匣母／過韻）を古禾切（見母／戈韻）に改めている理由は古音には去声がなかったことが第一の理由であるが，過（音は古禾切）と通用字であるため反切上字を見母に改める必要があったと思われるので付記しておく。

以上の例は本字本義本音を旨とした注釈の基本態度から生じた反切の改訂例である。

（3）

次に改訂理由が明白な軽唇重唇の問題てみていくことにしたい。しかし軽唇音化の問題は切韻系韻書の反切（大徐の引く反切も含む）が作られた以後に起こった[25]同一声母内で生じる現象であるから，まず反切上字の分類の上での同一声母内における大徐本と段注との異同例を考察することとする。（前節同様大徐と段注の反切を例示し，同部同韻の場合には声母のみ記し，部が異なる場合は所属する韻を明記し，末尾に段玉裁の古音十七部説の部を○の中に示した。）

○同母同韻例　18例　（反切の字づらが広韻の反切と同じ場合には＊を，小徐の反切と同じ場合には◎を末尾に付した。但し反切下字が異なる場合にはその後に反切を明記した。）

熛（10上43a）	甫遙切（非母）＊		必遙切（非母）
捈（12上51a）	方苟切(非母)[26]＊方垢切		彼口切（非母）
培（13下32b）	薄回切（並母）＊		蒲回切（並母）
軷（14上51b）	蒲撥切（並母）＊		薄撥切（並母）
被（8上60b）	平義切（奉母）◎		皮義切（奉母）＊皮彼切[27]

濕	(11上1, 41b)	他合切(透母)＊	它合切（透母）	◎
蕩	(21下17b)	楮羊切（徹母）	褚羊切（徹母）	＊
抶	(12上51a)	丑栗切（徹母)[28]＊	敕栗切（徹母）	
弄	(3上37a)	居券切（見母）	＊居倦切	俱券切（見母）	◎俱辨反
曲	(12下51b)	丘玉切（溪母）	＊	區玉切（溪母）	
𠕋	(12下52a)	丘玉切（溪母）	＊	區玉切（溪母）	
禦	(1上13b)	魚擧切（疑母）	＊魚巨切[29]	疑擧切（疑母）	◎
斷	(2下19b)	語斤切（疑母）	＊◎	魚斤切（疑母）	
嬉	(12下23a)	将預切（精母）		子豫切（精母）	＊子邪切
巳	(14下30b)	詳里切（邪母）	＊◎詳紀切	祥里切（邪母）	
觶	(4下59a)	之義切（照母）		支義切（照母）	＊
也	(12下32b)	羊者切（喩母）	＊	余者切（喩母）	
稂	(14上36b)	魯當切（来母）	＊	力當切（来母）	

『広韻』は『唐韻』の系統であるから18例中14例に大徐の反切の後に＊が付けられるのは当然のことといえる。広韻・小徐の反切と一致する段注の反切は4例に過ぎず，反切上字のみが一致するものを含めても7例である。このほかに古い説文音によって改訂したものが2例存在する。それは熛・嬉である。それぞれ『文選』の，熛は「答賓戯」[30]，嬉は「琴賦」「幽憤詩」[31]の李善注に引く説文の反切に改めている。また改訂の根拠を示しているものが1例ある。それは捈で「方字類隔，当作彼」という理由で改訂している。類隔とは軽唇音化以後の観点からして被切字と反切上字の声母が重唇・軽唇と異なることをいう。この場合に置き換えてみると，軽唇音である「方」を反切上字とすると，それでは被切字「捈」と類隔になるが，「彼」に改訂すれば「捈」と類隔にはならないということである。つまり段玉裁は被切字「捈」を重唇音と考え，「彼」も同じく重唇音であると判断していることになる。「彼」は『広韻』（上声紙韻）では「甫委切」[32]で軽唇音であるが，段注（2下14b）では「補委切」とあり，大徐本も同じ「補委切」である。段注において大徐と異同が生じていないことからも，段玉裁も大徐と同様に「彼」を重唇音と見做していたこ

とがわかる。そこで「捈」の反切上字を「方」から「彼」に改め類隔になるのを防いだのである。厳学宭の「大徐本説文反切的音系」[33] でも「彼」は博類の反切上字に列挙されている。また「捈」を重唇音と判断した理由の一つに小徐本の朱翱の反切が布偶反（幫母・重）であることも挙げられよう。この改訂例は段玉裁の改訂の意図に従えば次の同一声母内の改訂例に挙げるべきものである。残りの９例は段玉裁が何によってこのような反切を書き記したかは不明であるが，恐らく同じ子音であったため書き直す必要を感じなかったのではないだろうか。「蕩」の楮と褚の異同例でも明らかなように偏旁の差に固執しなかったのであろうと推測される。

○同一声母内の異同，軽唇重唇による異同　９例　（この場合のみ小徐本の反切の軽唇音化を参照するために異同例すべてに◎を付した。表記が一致しない場合には後に反切を明記した。）

瞟（４上２ａ）邦免切（幫母）◎		方辯切（非母）＊
崩（９下８ａ）北滕切（幫母）＊◎補弘反		方滕切（非母）
丕（１上２ａ）敷悲切（敷母／脂韻）⑮＊		鋪怡切（滂母／之韻）①◎鋪眉反
鑾（14上10ｂ）芳滅切（敷母／薛韻）⑮		普蔑切（滂母／宵韻）⑫＊◎僻噎反　方言郭氏音義による
芘（１下32ａ）房脂切（奉母）＊◎鼻宜反		旁脂切（並母）[34]
蓽（１下45ｂ）扶歴切（奉母）＊房益切◎頻役反		蒲歴切（並母）
𩔖（10上46ａ）符逼切（奉母）＊◎皮抑反		蒲逼切（並母）漢書の顔師古注等による
附（14下７ｂ）符又切（奉母／宥韻）③＊符遇切		蒲口切（並母／厚韻）④
痱（７下29ｂ）蒲罪切（並母／賄韻）⑮◎歩罪反		扶非切（奉母／微韻）⑮＊符非切[35]

このなかで丕及び附はとりわけ段玉裁の「支脂之」「尤侯」の分部に抵触する例であったため，既に前稿で取り上げたが，上字にも異同が生じているので再

度提示した。前稿で『切韻』の反切を付記したが丕には普悲反（切二）と敷悲反（王三）の二切があり，重唇音と軽唇音が存在している。この例からも窺えるように『切韻』『広韻』に代表される切韻系の反切には重唇音の区別はなかったと考えられている。そこで瞟・崩・痱では軽唇音化したことによって生じた反切の字づらの不都合を訂正している。そのうち痱は同部内の上声から平声への異同でもあるが，諧声符でもある非（11下32a甫微切）と説解「風病也」の風（13下6b孚音切，今音方戎切）とは双声であることなどから，軽唇音と判断している。その他の2例及び重唇音と判断した芘・萆は広韻の軽重唇音とも一致しない。反切の提示のみで，いかなる判断によってこのような反切が付されたかは不明である。萆などは諧声符卑声の卑[86]が段注では補移切で重唇音であることと関連があるのではないかとも思われるが，定かではない。未検討の反切下字の同部内での異同例とともに今後の課題としたい。

（4）

そして次に範囲を拡大して唇音舌音という調音部位の枠で見てみる。なお般（幫母から並母への唇音内での異同）のように前節で論じたものについては既に改訂理由の判明したものとして処理し重複を避けた。

○唇音内での異同　1例

覿（8下15b）必刃切（非母／震韻）＊　　紕民切（滂母／真韻）◎匹賓反

覿は「古無去声説」により十二部内で去声から平声に，『集韻』により改訂されたことで反切上字も異同が生じた例である。

○舌音内での異同　1例

啄（2上28a）竹角切（知母／覚韻）＊[87]◎輒角反　　丁角切（端母／覚韻）

この段注の反切丁角切では類隔切となる。類隔は唇音だけでなく舌頭音と舌上音の間にも存在し，舌上音の被切字に舌頭音の上字が付されることであるが，この「啄」は舌上音知母の字であるにもかかわらず，段注では舌頭音端母の反切上字が付されている。段玉裁と交友のあった銭大昕（1728～1804）は「舌音類隔之説不可信」[88]を唱え，上古には舌上音が無く，知徹澄は端透定と分かれ

ていなかったと論じ，その例として啄と同じ諧声符をもつ涿を挙げている。しかし大徐及び段注（11上2，24b）では涿は「竹角切」とあり類隔切ではなくなっている。またこの啄以外の豕声の諧声符を所有する字の反切は琢（1上30b）を始めとして類隔切ではない。このことから竹角切とすべきところを類隔切のままの反切を記してしまったものと思われる。

○牙音内での異同　2例

㝵（10下17a）	五到切（疑母）＊[39]◎五號反	古到切（見母）
齟（2下21b）	區主切（溪母）	巨主切（群母）＊其呂切◎俱取反

㝵の説解に「読若傲」とあり，段注でも「㝵与傲音義皆同」とあるにもかかわらず，傲（8上10a）の五到切ではなく見母の古到切にしているのは諧声符夭声（10下17a）の古老切によったのであろうか。しかし五と古は字体が似ていること，また段玉裁は『古文尚書撰異』巻2で古音では㝵も平声で敖と同様に「五羔反」であったと述べていることなどから段注本の誤刻ではないかと思われる。

○歯音内での異同　1例

蓮（1下3b）	士洽切（牀母）	山洽切（山母）＊◎山嘩反

○喉音内での異同　1例

歈（8下19b）於六切（影母／屋韻）③＊◎於目反　火麥切（匣母／麥韻）⑯

段注では「玉篇火麥切（匣母／麥韻）是なり」とあるが，この火麥切をとると3部から16部への移動となり，「古音は一部に在り」とある支脂之の独用と抵触する。にもかかわらず火麥切のほうが相応しいと考えたのは，歈が匣母であるからである。

○その他　3例

髖（4下16a）	苦官切（溪母）＊◎苦湍反	胡官切（匣母）
鬢（9上25a）	丘媿切（溪母）＊丘愧切◎區帥反	亡媿切（明母）
澍（11上2，24a）	常句切（禅母）＊◎時注反	當句切（端母）

この3例について大徐の反切の方に広韻及び小徐の印が付されていることと，

また鬢・澍の2例は反切上字の丘と亡，常と當の字体が似ていることなどから，転写の際の段注本の誤刻とも思われるが，校勘を経てた結果であるのでこのまま提示した。

(5)

以上反切上字について分類を試みたが，軽唇音化の問題についても本義本音で解釈しようとする姿勢が貫かれており，大局的には『説文解字』の理念を踏襲して本形本義本音に立ち返ろうとする基本方針を再確認することになった。反切下字の改訂例と比較すると，同部内での改訂例が125例（同韻内の異同が75例）と際立っていて下字例の半数近くを占め，そして支脂之の分部を始めとして自己の古音十七部説の運用のために行われた改訂が62例，注釈の基本態度から生じた改訂が43例であったのに対し，上字例は大半が注釈の基本態度から生じたものであり，軽唇音化も含めて同一声母内での異同は27例と上字例の約1/3である。このことは十七部の部立てに並々ならぬ力を注いでいた段玉裁であれば，予測されるべき当然の帰結であると言えよう。改訂例にはこの他に未検討の反切の加除に関わるものが50例程あるが，同部内また同一声母内の不明瞭な改訂例とともに今後の課題としたい。

最後に段注と大徐本の反切の異同を調べるに当たり，説文読書会作成の「諧声標音カード」を利用させていただいたことに改めて感謝を申し上げる次第です。

注

1) 『説文音隠』四巻は『隋書経籍志』に著録されているが，現在は亡佚している。しかし段注には時々引用されている。例えば哆（2上13b）では『一切経音義』に引く『説文』は『音隠』に本づくと述べ，反切殆可切（定母）を示し，その後に唐韻つまり大徐は丁可切（端母）と併記している。なおこのような例は異同例とは見做さなかった。
2) 『お茶の水女子大学中国文学報』第7号　1988年所収。
3) 大徐本では木部の新附字に梔を挙げており，反切は章移切とある。
4) 他に市制反，時設反が提示されているが，ともに禅，祭韻である。

5) 大徐本では水部の新附字に瀟，相邀切（心母）を挙げているが，段注では俗に瀟を瀟と改めるのは誤りであるといっている。

6) 旖（7上19a）檹（6上25b）移（7上44a）を参照のこと。

7) 他に『中庸』の市若反，『玉篇』の時灼反，『広韻』の市若切を提示しているが，ともに禅母であるため周礼考工記の反切のみに留めた。なお『広韻』には之若切もあるが，動詞の意味である。

8) 『漢書』「婁敬伝」に「孟康曰輅音胡格反」とある。『広韻』去声暮韻に洛故切があるが意味が説解と合わない。5部から16部への移動であり，段としてはこちらに重点があったと思われる。

9) 魑を大徐は鬼部の新附字に挙げ反切は丑知切としているが，段玉裁は离の俗字であると考えている。

10) 佼の反切を「按交義當依広韻古肴切」という理由で改めていることから，同じ諧声符交声をもち佼を仮借字とする姣も見母に改めたのであろう。

11) 『広韻』下平陽韻に「萌，忘也」とあり，『校正宋本広韻』では忘を悪に改めている。一方周祖謨の『広韻校本』には「忘，段改作忙，蓋據廣雅遽也一訓」とある。段玉裁は萌を今の忙字であると段注で考えていることから，広韻も忙に改めようとしたのであろう。しかし説文の説解は忙には改めずに，「翌也」を「昱也」にすべきだとしている。

12) 段注では「按當讀如芒」というのみで具体的な反切を示していないため，芒（1下35a）の反切武方切に置き換えた。また段注に「帟絖古蓋一字」とあり，帟（7下46a）と同じであったと考えているが，帟には呼光切の反切が付されている。

13) 『広韻』下平耕韻に「崝　七耕切」（小韻は段が今字とした崢）とあり，『広韻校勘記』（十韻彙編所収による）に「崢。段云唐人分別如此。注士耕切之士。澤存巾箱兩本均作七。段改作士」とある。周祖謨も「士耕切，是也」（広韻校本）とする。

14) しかし段字の反切は徒玩切のままである。

15) 段注では「巨員切。大徐但云居轉切」とあり，消極的な改訂と判断した。

16) 『文選』「子虚賦」では，裶の字が当てられていることから，『広韻』上平微韻にも「裶，衣長皃」とある裶の反切「芳非切」を採った。『広韻』では上平灰韻に「裴，長衣皃」とあり大徐と同じ薄回切である。また微韻には地名として符非切が載っている。

17) 説解に「讀若豪」とあることも乎刀切に改めた根拠の一つである。なお諧声音符敖声をもつ字は敖（五牢切）を始めとしてこれ以外はすべて疑母である。

18) 『広韻』では上平魚韻に「臚　力居切」とあり，広韻校勘記に「段云臚古音閭」とある。閭の字は段注（12上8b）では力居切に作り，閭の古義は旅であるという。

19) 旡が僾の正字であることについては，段玉裁が友人劉端臨に与えた手紙（第26書）にも見え「今年説文稿成百四十頁第九編已發軔矣。無處不有掫獲前書所言之例。…

飲食并氣不得息曰旡。旡即詩亦孔之僾之僾字。…數千年來乃不知僾有正字。僾訓仿佛皃。假借字也」（経韻楼文集補編下所収）と書き送っている。

20) 諧声符尨声をもつ字はこれ以外はすべて莫江切（明母／江韻）である。なお大徐の反切は水部，土部の字に対して亡江切(微母／江韻)，力踵切（来母／腫韻）とある。

21) 『広韻』では入声麥韻に士革切と楚革切（初母）の二切が載っているが，動詞と名詞であり，説解「矛属」に照らすと楚革切のほうがふさわしい。

22) 段玉裁が知母ないし照母と見母とが双声となると考えていたことについては，倉石武四郎氏が「段懋堂の双声説」(『服部先生古稀祝賀記念論文集』1936年所収）において鼓の条を引いて言及されている。それによると等韻において同じ清音に属することから寛い幅の双声と考えていたことがわかる。

23) 大徐本には「又火活切」とある。

24) 『広韻』では上声講韻に「胡講切又火口切」とあるが，『広韻校本』に「北宋本巾箱本均作大口切，與玉篇及大徐説文反切相合。當據正」とあることから，「火」を「大」に改めている。

25) 反切上字分類表を作ると，「非敷奉微」に分類される文字ができる。これを通常「軽唇音」というが，実は「唇音の細なるもの」というにすぎない。「唇音の細」の一部分が後世「軽唇音化」する。例えば「甫・必」は分類表では同じく非母である。しかし「甫」は後世「軽唇音化」し，「必」は軽唇音化しなかった。このことは反切作者の知り得ぬことである。

26) 方苟切を段注では「方口切」に作る。苟・口ともに厚顔。

27) 被は『広韻』では上声紙韻に「寢衣也。皮彼切又皮義切」とあり，去声寘韻に「覆也。平義切又平彼切」とある。そこで意味から段注の側に印を付した。

28) 大徐本の反切「丑栗切」は四部備要本による。その他の諸本は「勑栗切」（透母）とあり，類隔切となる。

29) 『切韻』(『十韻彙編』による）の反切は魚擧反（王一，王二）とある。広韻では画数が簡単な字を用いたのであろう。

30) 「答賓戯」では猋に仮借しており李善注に「説文曰熛火飛也。猋與熛古字通。並必遙切」とある。『文選』にはこれ以外に「甘泉賦」と「風賦」の李善注に説文を引用している。

31) 「琴賦」には「説文曰嬉嬌也。子庶切」とあり，「幽憤詩」では姐に作り子豫切。また怛（10下37b）に「此與女部嬉驕也音義同」とあり，反切は子去切。

32) 『切韻』には「甫委切」（切三）と「卑被切」（王二）の二切が載っている。なお李栄の『切韻音系』（語言学専刊第四種 1952 年）§36 反切上字系聯情形では「彼」を「北・波」と同類とし反切は「補靡」とする。

33) 国学季刊 6 — 1　民国25年所収。

34) 房と旁は字体が近いこともあり，段注本の誤刻である可能性もある。また段玉裁が

『説文』を校訂するのに時々用いる南宋の李燾の『説文解字五音韻譜』では「芘，旁脂切」とあるが，一致例はこの一例のみで，この他の同母同韻例及び暶・崩・痱の反切は大徐本と一致する。

35) 『広韻』ではこの他に蒲罪切，扶涕切があるが，意味から符非切を採った。

36) 厳学宭の論文では卑を博類の反切上字として列挙している。

37) 『広韻』では入声屋韻に「丁木切」，覚韻に「竹角切」がある。『切韻』の反切は丁角反（切三，王二）子角反（王一）竹角反（唐）とある。

38) 『十駕斎養新録』巻5。

39) 『広韻』では去声号韻にあるが，意味が異なり「陸地行舟人也」という。同じ号韻に「傲　慢也。倨也。説文作敖。餘倣此。五到切」とある。